

(連載「ワイワイガヤガヤ経営品質」)

三重県経営品質協議会運営委員長

長友 隆司
(Kairos 社長)

学校へ行こう！

三重県が生んだ著名人の一人に小津安二郎がいます。

小津はたった一本だけ三重県をロケ地にした映画を遺しています。名作「浮草」です。雁治郎のしぶい演技や京マチ子の妖艶さの他に、昭和 30 年代の志摩半島の美しい景色が見る者を惹きつけます。

志摩半島は海の国、舞台となった浜島町の隣に宿田曾という地域があります。古くは宿浦、田曾浦と呼ばれる風待ちの港で、昭和 30 年代、40 年代には、日本一の遠洋漁業の基地として知られていました。日本が高度成長期を迎えていた時代、こんな田舎の漁村にも新しい波は押し寄せ、近代漁業の名の下に多くの若者が遠く「七つの海」へと出かけていきました。

当時の中学校の様子が「かしき達と女教師」という小説に描かれています。「かしき」とは、乗組員の一番下っ端、食事担当の小間使いのような存在。著者の大西敏さんは当時、宿田曾中学校の先生。卒業式を待たずに遠洋漁船に乗り込む教え子たちとの交流を自然体で綴っています。今となっては、「二十四の瞳」にも匹敵するキラキラとした教育の現場がそこにあります。

田舎における「学校」という言葉には特別な意味があります。地域の核、生活の中心。何かあると人々が集まり、顔を寄せ合い、力を出しあい相談し、そういうパワーが学校にはありました。地域の崩壊は学校の荒廃と無縁ではないのかもしれない。

三重県には「学校経営品質」という取り組みがあります。民間企業や組織が取り組むいわゆる「経営品質向上活動」のほかに、行政が自らの行政改革を進める上での「行政経営品質」。そして学校自らが、教育現場の改革を目指して取り組む「学校経営品質」。大きな柱の一つです。

最初は県立学校を中心とした取り組みでしたが、今では遼原の火のごとく市町立の中学校、小学校にまでその取り組みは広がっています。

例をあげましょう。かつて小津が代用教員として赴任した飯南地区にある飯南高校では、高校が中心となって地域の中学校、小学校を巻き込み、父兄ばかりではなく地域の人々とも連携を深め、小中高一貫した教育体制を作り上げ、地域と学校が一体となった「人づくり」の輪を広げています。

また「浮草」で雁治郎演じる旅役者、嵐駒十郎が京マチ子と別れるシーン、「桑名の檀さん、頼ろうと思うてな...」と語ります。その桑名には桑名北高校があります。退学率が高く、現場の悩みの深い学校でした。経営品質に取り組み、教師自らが自己変革の必要性に気づいた時、生徒の視線が初めて教師を捉えたのだそうです。現在では限りなく退学率ゼロに近い学校を作り上げ、生徒ばかりか父兄、地域から信頼の高い学校を作り上げました。その取組過程の映像記録を見せてもらったことがあります。「生徒の顔が輝いている。ええ学校やなあ」と思いました。

その他にも、四日市北、朝明、四日市農芸、あけぼの学園、昴学園...。三重県では学校が変わり続けています。どうぞ三重にお越しの際は、「学校へ行こう！」とおっしゃってくださいまし。喜んでご案内いたします。そうそう「浮草」には高校生役で川口浩が出てたっけ...